

ハマ街ビト

横浜には、独自のサービスや技術の強みを生かした魅力的な企業、団体が多く存在しています。このコーナーでは、LTR独自の視点で他社の参考になる先駆的な取り組みや、新たな挑戦をする企業とヒトをピックアップ。今回は、多様な人材が活躍できる組織づくり“ダイバーシティマネジメント”に取り組む企業をご紹介します。

途上国への技能移転による国際協力が目的である「外国人技能実習制度」。しかし、外国人労働者なしでは社会が成り立たない中で、いつの間にか趣旨がすり替わり、人手不足を補うための制度となって、多くの改善すべき問題点を抱えています。このような状況を問題視して、異国の地で頑張る実習生をサポートし、気持ちよく働くことのできる環境づくりに奔走している企業があります。横須賀・横浜エリアを中心に介護事業を展開する株式会社スマイルです。実習生を通じて異文化への相互理解や多様性を認め合うことは、専門的な知識・技術だけでなく、円滑な人間関係を築くためのヒューマンスキルが求められる介護の現場において、質の高いサービスへとつながります。今回の「ハマ街ビト」では、そんな外国人材の受け入れにあたっての準備、心構えなどを中心にお聞きしたインタビュー記事をお届けします。

(行政書士 藤森純一)

介護事業者 株式会社スマイル

～礼拝所を併設したインドネシアカフェ～「HARAPAN」

外国人材を受け入れるためには？

今回取材場所として訪れたのは、株式会社スマイルが運営するインドネシアカフェ「HARAPAN」(「HARAPAN」はインドネシア語で「希望」という意味)。インドネシアの食材や雑貨も購入できるほか、イスラム教の礼拝室も併設されています。さっそく株式会社スマイル 常務取締役の嘉山仁(かやま・じん)さんに、こちらをオープンした経緯から伺いました。



株式会社スマイル常務取締役 嘉山仁さん

【嘉山】2020年2月、インドネシアから介護スタッフとして技能実習生を迎えました。そして、2年以上が経った今は「長く働いてもらいたい」と願う貴重な人材になっています。そのためには、今の環境が“快適な場所”でなければなりません。そこで真っ先に浮かんだのが、「食」と「信仰」のことでした。——インドネシアだとイスラム教徒の方が多いのでしょうか？

【嘉山】そうですね。現在の技能実習生のうち、大半がイスラム教徒です。そのため、食に関しては「ハラールフード」(豚肉とアルコールが禁止)で、1日に5回礼拝の義務があるなど独自の慣習があります。

——それで、こちらのスペースを作ろうと？

【嘉山】はい。アルコールが禁止となると、日本で主に市販されている調味料も使えません。残念ながら横須賀市内にはインドネシア料理店がなく、現地の食材やハラールフードを扱う店も数えるほど。だから、祖国の食材や商品が気軽に手に入り、簡単な軽食や喫茶などインドネシアの味が楽しめる場所を考えました。同時に求められていると感じたのは、安心して礼拝ができる場所。そこで礼拝室を併設したカフェスペースを作ろうと思いました。今後はここを拠点として人が集まり、インドネシア人同士はもちろん、日本人との交流の場になればいいなと！



温かみを感じる「HARAPAN」外観



取材日は、近隣に住む方がカフェやランチを楽しんでいた

——人が自然につながる場所があるのはいいですね！

【嘉山】そうなんです。初めて訪れた国で初めての仕事をする——慣れない環境での毎日は、私たちが想像する以上に大変なはず。だからこそ、周囲のサポートが必要だと感じています。



日本人にも人気！インドネシアの味が楽しめる調味料



お祈りのタイミングが分かる時計の設置も！

—サポートは、こういった場の提供以外でも？

【嘉山】もちろんです。利用できそうな店舗の情報を教えてあげたり、交流できそうな人を紹介したり……。何かしら動くことで、「私たちは大事にされている」ということが伝わり、それが仕事への取り組み方にも表れてゆくと思います。



静かで落ち着いた雰囲気
の礼拝室

—「送り出し機関の選択」は重要なポイント

—技能実習生の受け入れを検討する際、何かアドバイスはありますか？

【嘉山】とにかく「余裕をもって準備する」ということです。ビザの問題などもあり、受け入れには最低1年以上かかるケースが多いと思います。さまざまな世界情勢の影響を受ける可能性もあるので、計画通りにいかないことも視野に入れておくといいでしょう。

—まずは外国人材の送り出し機関に話を聞き、そこから準備を進めてゆく形ですね。「送り出し機関の選択」が一つの鍵になりますか？

【嘉山】はい。残念ながら、中には技能実習生に多くの借金を背負わせているようなところもあるんです。“とりあえず送る”のようでは人材の質にも影響するので、しっかりとした機関を選ぶことが大切ですね。どのような職種で、どのような人材レベルを求めめるかの大枠を決めた上で、各国の大使館や公益財団法人国際人材協力機構などで話を聞く方がいいと思います。

—嘉山さんは、現地に赴いて面接をされたそうですね。皆さんに会ったときの印象は？

【嘉山】介護職では日本語のコミュニケーション力もある程度必要になるのですが、言語のレベルの高さはもちろん、礼儀正しい印象を受けました。また、インドネシア人はイスラム教徒のほか、キリスト教

徒やヒンズー教徒の方もいるので、お互いの宗教を尊重しあう部分があります。細やかな気配りや、思いやりの姿勢も感じましたね。

—受け入れが決まった後、社内でビデオレターを撮影して現地へ送ったとか？

【嘉山】はい。先輩たち（技能実習生の1期生）が実際に働いている姿や職場周辺の様子のほか、日本人社員からの「待っています！」というメッセージも入れました。本人はもちろん、そのご家族にも安心してもらいたいですからね。

日本での経験を生かし、 祖国で活躍してほしい

—受け入れにあたり、日本人社員への説明で心がけたことはありますか？

【嘉山】事前に、面接時の動画を見てもらいました。技能実習生たちの「日本で働きたい！」という前向きで高い志をもった姿を目にしたことで、こちら側も「しっかり受け入れよう」という気持ちになれたかと。さらに、現地で一般家庭の様子も撮影させてもらったので、その動画も共有しました。ありのままの生活を見せることで、まったく異なる文化圏から来て働くことへの大変さや凄さ、理解が深まったと思います。

—最後に、今後の夢や目標をお聞かせいただけますか？

【嘉山】技能実習生が祖国に帰ったとき、日本で培ったことを生かし社会で活躍してくれたらうれしいですね。それは同時に、一緒に働いた私たちが「世界の役に立っている」と実感できることにもなりますから。また、近い将来、私たちが海外に出て「介護人材を育てたい」という目標もあります。「介護職が国際的な仕事になる」という夢の実現に向けて、これからも技能実習生、日本人社員とともに頑張ってゆきたいと思います。（取材・文／小林 真由美）

HARAPAN の
HP はコチラ
から→→



さらに詳しい
記事が読める
ハマ街ビト
(番外編)は
コチラから
→→

